壬辰春王正月

宝穂京図

画人豊千橘花松

うつ不葉図

特別
へ12
5120

画帖川口氏

くつ布物語巻乃すゑに見侍りつる大臣公の御むすめなる人
おほかれと古き物の本子雑乃内を求め侍るなり孫八に
見せまいらせてみれと若紀えし申訪とも持せ給ふ御内にし
語るなと見り我そて申し語らるをと云侍りし御年ころ
そしうけの女房ハうけ給はりまいらせし此のことまてその御子の
事の報ほ生れ給ひしより世ゆきおひ出給ひ位よしみへる
ものみなふかりあれこれしる侍る巻乃美事とあるを
しるし給ふ見るしらすよ書き人々もきこえてこそ人々に
くも御侍りしまむかしおとりき侍る孫とかめおもとの家

美織文庫蔵書

A12
5120

もろこしにより川の事言しめしをとくかられけれ世を
れんみなぬきにつらてもしぬもおほく侍らんなも
まつしあやまちなきにしもあらずましてふりき
人をたとし孫とこころへみえてむしも今も人への
心のおなしき事まや事なくおしもうるも法とまちとらん
あり今み給へたつねことなるけれとこひあんに
太あまうちえるりの今まひくとうし妻への
ほいておやつのなく見のかもりなしめくあつ　みなり
ほきえ上下北しまひ世のつきくなきこそれいま

ころもあまきまさつて給ひみす人きこふもあり次まして京都
今は給し紀とふし侍りとこれは国をそことれいて
もしそ猶きくの孫は北くるもおほくむくかもひきひ
なりとの子もむまこなれは此物かたりをとみ侍は時のたより
ふれてあるし侍る所　ねんぬとをはすまふおもひぬ
ひとをもうるくいふしや

板本巻々次第

○蔵ひらき 上之一 上之二 一 中二 下三

○楼の上（上之一 上之二）四（下之一 下之二）五 ○菊の宴 上 六

此巻上下遠

○藤原の君 七 ○たつの村鳥 八 ○たゝこそ 九

○ふきあけ 上十 下十一 ○祭の使 十二

此巻上下遠

○嵯峨の院 上中下 十三 梅の花笠 十四

○初秋 上下 十五

○としかけ 上下 十六

○あて宮 十七

国ゆつり 上之一 上之二 十八 中之一 中之二 十九

下 二十

都合二十巻上下ところ〳〵三拾巻也此次第のとくまてを

流布本にしよりて私に次第を

私に定巻の次第

△三 藤原の君　二 忠こそ　△一 としかけ

蔵ひらき 下　祭の使　梅乃花笠

吹上 上　菊の宴　初秋

あて宮　たつの村鳥　蔵開 中上

国ゆつり　嵯峨の院　楼の上

一花ひらきの下此巻ハ花ひらきの下にあらすその心ハ花ひら
きの巻ハ秘事なりたて中伝を後に大事とす夫ゆゑ是ハ
巻ニ伝授とあり又ゆゑて家々東ニ有り説々あるの事
之是よりて又ひらきの事あるまじき事とし此を
としうけ此巻の後に入れて口伝しるへき也
一梅の花ひらきの巻乃末いひきよしにあまきといふ
下冬ゆゑ又此巻の末なるへし
一たつの枝是ハ巻乃末さらのかゝまるを松の枝なる
とりてといふより下ハ梅乃前巻に同し

先帝

中務宮 御母不知 後京の君ながらも先帝の御たてかはり乃中務の父とす

嵯峨院 御母不知 梅の花笠の老をおりませたまふよし侍

朱雀院 御母不知 梅の上乃老を院御かたちの姿にて七夜又夜かかりしかに二夜ハまさりしそれをおてまてあらはれけりとす 又嵯峨の院乃老また奇殿の御かたちに御子ハ夜おろし 侍をよし 帝 何事とあるもと知りしまゐり一事の知りもと下まの是

式部卿宮
御母不知

右馬君
母不知条の侍従君に式部卿の宮の
后宮の君とこそ此人なるへし

女
母不知梅壺の君に宮の女御此人々猶例の
の君にまゐらせたりけりとかや
御子の君朱雀院の女御とそ

中務宮
御母不知

兵部卿宮
御母不知

女
母不知梅壺の女御腹のめのとにゐる御
同し君につかはれたりかりの文ありけるよ
よしとかや

嵯峨院

紀伊国
源氏宮
又はこのかみとも云人とも云
母梅壺の女御上の君三品御子此家の御ゆかりしめしは
堀川大臣の中務宮されは神林に宰相中将たつの折にさ中納言

若宮
男宮とも女宮とも申し梅の上に大臣の御子の腹とそ

女一宮
御母后の宮藤原の君左大臣まさよりの姫君なりける大宮とかや

女二宮
御母不知

女三宮
御母不知后腹のかたきさきれ小宮にてありける

女四宮

御母后宮の女と申 今上の后に立給ふ [illegible]

嵯峨院の皇子と申

今上

御母后宮の皇子東宮とあり 嵯峨院皇子今上と申

二ノ御子

御母宰相にして法師となり 嵯峨院 西山にかくし給ふよし

さゝの隈の皇子と申

弾正宮

御母

七宮

御母中の君帥女御と嵯峨院皇子と申

八宮

九宮

御母更衣と嵯峨院の皇子と申

女一宮

御母仁寿殿女御 嵯峨院より此女宮常陸宮の后一の内親王と申 たつの[illegible]

皇子たるたての小北方となり 梅の上皇子男子なくて [illegible]

皇子とあり

女二宮
御母宮家

若宮
御母後蚕御ものさよりの女あて文ときこゆ

二宮
御母同

三宮
御母なし蚕女御かしこまきの女

四宮
御母宮ちた介女御そうかゑ不同し

○左没大臣 諱ともなし
藤原某の老子右大臣ヽ出家の北の方の子に薨しまよ
し宮家の使者にてハものさよりのまれ給可事

さ福ふさ 某 為冠者ともに
母家後京左老子中将出家の老ノ大将民部卿とも云

さ徳よ里
母家出羽老子中将後宰相

さ孫角く
母家宰相と云ふ後新中納言

女

母家女房なり 春宮に宣旨 按察と申す

某

母少将 又尼乃出入のたびにかくれてひ死なりし

女

母少将 家房りの室に 後に東宮 宣旨にまいりける

参りそよしと申

まさただ

藤原元の室にむかし 藤原の元と申す一遍の源氏 あそん

ましけりよ後河のかんたちめのみこたちむすめにてそんと申しき

中将の右近大臣のひとりむすめに [illegible] 顆むこどり

かぎりなくいとをしけれは まりのの [illegible] 帝の御 [illegible]

女一のみこと申す [illegible] 父御門 [illegible]

たゞいまのこゝろあまり [illegible] 人なり [illegible]

むかしの比人 [illegible] むことりなりとも 白居

にたてまつりける三位大納言 [illegible] たゞ [illegible]

村上天皇のさい院の [illegible] 神林(?) [illegible]

後 [illegible] の帝の御時中将とぞ

柳の前 [illegible] あり 白人 [illegible]

たゞふさ

母家藤原元房の女に たゞ大将たゞの村上 [illegible]

ときはこ
母同藤原恵子 右近衛のかけ持のむすめ大輔
たつの村まつに大弁

あけすこ
母同藤原恵子 右近中将為人ゆたかの村のむすめ宰相

ゆらはみ
母同藤原恵子 左馬佐文屋中将ゆかりのむすめとなる

あきはこ
母わかいとの藤原恵子 太皇太后宮佐持のむすめ子 右馬佐

かほはみ
母同 藤原恵子 無品大輔持のむすめ子 めの

なりはこ
母又藤原恵子 伊賀のかみ助けの卿の下にらうさん離れし人
訓ともなし

八郎
母わかいとの藤原恵子 わかいとの大輔となる

きよはこ
母同藤原恵子の女房の女二条上人となる

よしはこ
母又藤原恵子 右近衛の尉為人持のむすめ子大輔の尉

ちりはこ
母わかいとの藤原恵子 大夫となり

女

母是本并君と申也朱雀院の仁壽殿の女御九族京北
君は御そりとの今の帝まつり申下生給ひかり男児人
女三人七人の是たらはは母そて一の御座し三十一とそ立

女

母おかの爰の族京の君れ是そせんたいの御んとかからの中将の
是の小方と有

女

母同族京の君れ是は太の君の以族の院の宰相の小の方

女

母同族京君の是は右大臣族の次郎をの中将源の
さ給まり乃小の方

女

母是族京の君是は民部の小方子二所うちそとそ

女

母同族京君是は左大臣族京の柏まき氏太郎乃小方

女

母同族京の君是は右大臣族の大納言の今族京の
たくとしの小のこ

女

母同た君の藤子なりかし

女

母是九の君御て是とゆ是又あてこそとそもあてこその是は

东宮上系図て後つれと申大臣

女

母女きみこそと申す源氏君しの御せうとたちの梅壺の女御
大君のさかりとそせんしえて君しまゐりし也

女

母か（いとの）いとの

女

母同

女

母更衣そて宮とこ中宮 又更衣そてことども

女

昔は更衣と申す君たちの横笛よこたきは十二の君とも云

系

母同とやあこ君と申す落窪の君子六位と云

○夜寒 右大臣　詞ともなし

忠まさ
母ハ前斎宮の尚侍の姫君おもひせしハ右大臣のおもひ人となる
弘徽殿女御あつかひきこえてけり

忠とし
弘徽殿の女御大納言ときこゆ

宰相中将　詞ともなし

蔵人少将　詞ともなし

女
此人弘徽殿の女御ときこゆ

かはらまさ

母ハ二しらけの君にてゐこ君とて山寺年十五入内とあり
同御代の中宮大納言の女也后宮に立后 嵯峨院の院の宮にたてまつり大臣
となる 此方ハ嵯峨院の女三宮内子あまたありし 後京極
まさしらけの女なり 位なし

女

母ハまさよりの北方あかつき嵯峨院の中納言の御むすめ
かの女まさらあは母のえらみりとも

なりひら

母ハしらけの女三条京極殿しらけのあはうる殿に生まれ給ひ
みなもとの母君も山に入りつる程に 位有十二年まで父君に従ひ
京に帰り十六まで寂しく暮らしけるを一度見せむとおもひし
そしらけの君にて三年間し 君は十八にて侍従に任ぜられ 大臣に
君は正四位 大将中納言兼任の君は中納言になりつるの君は大納
言の大夫ね日君の月はみえあね

某

母ハ継の女にて 父の君にて山寺横にまかりたまひ出家の
薬師さとりの院し 後居所まゆりし寺

女

母ハ二しらけの君は東宮に参りのへてましゐ 西秋よりまし給
ばゝ御子 男御子生まれ

女

母ハ朱雀院の女一の宮いまだ宮と申す

某

母同

○橘のちかけ

たゝこその妻子なりける右大臣とき　初のわか子　一世の源
氏の女らセ給ひて後妻つまの北の方たゝつ子らせ給ひて
まゐりおはせしまゐりて位すゝみし

さくこと

母一世の源氏の女たゝこその妻子十七にて后に立せ給て後出家
そまたにおこなりしか女の御上の妻子　帝紀集あり
御幸の時めしいて後御出家とき

女

母家の子まさのおもひ人前用妻子　一条の女子まさ北方
位の子権子文いまて今の后たちつけ給ひし人

○源の某子

たゝこその妻子右大臣とき

○たつ子の小の方
法の女をもし たつ子をせ給ひし塩ちらけ母なりて侍従上
よし家たつこその母

○平まさかぬ
平中納言とも号

そのまさけ
初林左大臣 平中納言 母の太郎 なりまさけの君程なる

○深ちけなき
藤ひさきの子 左大臣とも

なりまさ
月しをすまさけなりのおもての二郎とあり かたのうち幸の時
和哥の部をしく人梅のそうするき たすなるのあなる月をすき帝の
御まは様の家よなりたつの母へ父のもて来りし人も謹よ中なる
後出こなりしあふ

女

某
母小の方

某
母同

女

母同

○在原行平 やまと
文徳天皇の御時にあてなる女房大宮の文 嵯峨帝乃孝子
をものゝ

女

母は紀有常女なり 此の方延喜の御時 ふ年 やまと乱も
と世の中に名高く ゆかり 出まり 名を世

○清原大君
やしろけの妻なり 武蔵の守藤原の大納言 清原の大君なり
御子かの子との子一人有りけり

やしろけ

母やしろけの妻なり 人もと云人と云七年生なり 年 宮兼入にあて
元慶の年 やまし十二年まて加りけり 進士になり 武の店の庭に
年まれ十六年になり 年 延喜十年に病り 三年九年まて 月日に
病り 武蔵の守になりて 原に有りて 東家の学士になりて
以後武の守備まて 大納言なりけり 又深山に ひけり 宰相となり
梅の上のなり けり田の中納言

女

世一世の源氏女なり 此の方お行門の姉なり 歌り位なし
よしみしろけの妻なり 和秋の妻は内侍の名を 出雲の
三位 梅の名 正二位

○一世の源氏
詳ならし

女
母ハ家としらけの宮

○かみなひのたは中川
此人の君ハ紀伊守の歌よりみなひの大将中川と云へき者
さかりなきたくしの家にて若き人なれまつらとしてへきを
申しけるいつくの位記えりて紀伊守とをなされけるとぞ

女
母ハもとハあさまれ女院殿の御の女房人源氏君としの御母うき
あはれの君ハ内の房人つらくまうてもわかれしとし源氏一
ところうまれあはれ乃母うしなへくらん御乃帝とちよしあ
まをて女も女房なりてくりとあり

○源の清ハあそむ
大納言と時よしの君

女
母ハ家とそハ中川の妻となりの女

○せきまさ

藤原の君の巻に藤壺八月そのと云十まてこゝにこしへ
有て八とせといふ目数へ侍り 後式部のせうくけしき
藤人をとしかへてかくあり こえて大将殿に任ず有りぬるを
初秋の巻にあるは左大臣の村主にて 宰相中将

○藤原のをとゞ　ゑい忠こそと言はす

祭の使の巻にけしきの大弁なん 公けの大臣の一男とあり
又宰相中将よりもたゞの村主のかね家の省文章
博士東宮の学生内東宮坊の蔵人省まれ番りあり

○ちりまさ　ら[illegible]けと言る

初秋の巻に上達部のひとの一人らをよおねもん候めれとあり此人か
菊の宴にかくあり源氏大内記東文丸子至てるうれ
ぬるとあり

右は宇津保乃巻の名清書とて人のこゝろ作りしを
こゝに書付ぬ

第一 としかげ　　第二 藤原の君　　第三 たゞこそ
第三 三のなかひ　　第四 嵯峨の院　　第四下 祭の使
第五第六下 吹あげ　　[illegible] 菊の宴　　第五 吹上や
第七　　第八 沖つ白波　　第九第十第十一 蔵ひらき
第十二第十三第十四 國ゆづり　　第十五第十六 楼の上

又

としかげ

藤原君

たゞこそ

春日まうで
吹上 上下
内侍督
蔵ひらき 上中下

嵯峨院
きくの宴
沖津白波
国ゆつり

祭の使
あて宮
かつての宮
楼の上 上下

うつほ物語今の板本三十冊次第雑乱巻の名お遠のかのあり林前代氏古本を考巻の名のたくひをたゝし十六冊とす次第左のことし

うつほ物語 上ハ古本の次第 下ハ板本の次第

うつほのたていイ
としかけ　としかけ 上　十五
としかけ　としかけ 下　十六
藤原の君　藤原の君　七
田子イ
たゝこそ　たゝこそ　九
梅
春日まうて　梅の花笠 古本ハ無 今　十四

十九丁表九行目春日詣ノ次梅ノ花笠ト云ヲ下ニ巻一冊ト云ヲ為ス

嵯峨院　四
祭乃使　四
吹上　上　又
嵯きゆけ　下　又
菊の宴　上　又
菊の宴　下　又
あて宮　六
内侍のかみ　上　七
沖つしら波　下　八七

蔵ひらき　三
祭の使　十二
嵯きゆけ　下　十一
吹上　上　十
菊乃宴　上　六
菊の宴　下　六
あて宮　十七
初秋　上　十六　古本なし
初秋　下　十五
左川の村鳥　古本なし　八

沖つしら波　八

此巻乃名ハ人て左大中ゑを
詞も出しける事なし露ほとも
但しあて宮ふけ給ひし人々同
しやうにうせなんとしけるを
うけ川給ひしあるハんゆめあて
まことなるとのきまり
さそかれんる事あり
古今集ニ立ける歌とも
おきても人の心とおきつ白波

赤く楼の巻
儀あり　八

こゝろの乱れや柳花帯存し
此巻の末其丁裏より次乃
うたを松の枝なりとりてと
云より下此巻花添まて桜の巻に
詞あり後考せよとしるせり

花むしき　上ノ上　九　　花用　上ノ一　一
花笄　上ノ下　九　　花むしき　上ノ三　一
花比良歌　中　十　　久乃花き　中　二
花ひらけ　下　十一　　国中添色　下　二十

国中添色　上ノ上　十二　　国中川色　中ノ上　十九
国中添り　上ノ下　十二　　国中添り　中ノ二　十九
国中清色　中ノ上　十三　　示中つり　上ノ上　十八
国中川祭　中ノ下　十三　　国中添色　上ノ二　十八
国中つり　下ノ上　十四　　清御院　上　十三
玉拾添り　下ノ中　十四　　清御院　中　十二
国中添り　下ノ下　十四　　清御院　下　十三
梅乃之人　二ノ上　十五　　梅の之人　下ノ上　五
梅は人　上ノ下　十五　　梅乃々子　下ノ三　又

桜の之丈 下上 十六 桜乃久を 上二 口

桜花之丈 下下 十六 桜乃久子 上三 口

古本十六冊

猪苗代氏ら流 保物紙端書

古本数本を以考訂しつ且此段第のとしたてを
くむ〆め法ぞ不宜し此段をもち段々を不好
図を者 桜の之乃考ていりて八段々文除々を元へ
り尚追々右本とれを一考者なり

此しるけ 上下八段

一段 としろけ 卯

二段 京極 廿七丁オ 十一行

三段 まなく尾花 廿九丁 初行

四段 岸ちり 三十三丁ウ 七行

五段 うは市 三十七丁ウ 十行

六段 若比もされ 四十丁オ 四行

七段 三条 四十五丁オ 五行

八段 風の松 七十一丁ウ 九行

父ゟられて三年

かくて八月中の十日

かくてくの女男い夜の事

かくてゐきくし

抱の日帝小比法小守き

此る抱ひてにりと身顔く

うしろて八月十

藤原の君 初丁 七段

一段 藤原のきこし
二段 なて文 十丁オ九行
三段 かんはきの文 十八丁オ初行
四段 殷仕のおそく 廿六丁オ二行
五段 かきまさ 三十一丁オ七行
六段 滋野帥 三十九丁オ初行
七段 たるそく 四十九丁ウ八行

かくてみともなきかくらく
かくて又うへつかたのこや
かくていやしき人のなかに
まことにたはよしこゝろ
さい城のを川
かくて七月七日と

たゝこそ 田子イ 四段

一段 たゝこそ 初丁
二段 一條 二丁ウ八行
三段 名ある常 七丁ウ七行
四段 う川をみ 二十丁ウ十行

英 嵯峨まうて 三段
英 桂 一段

かくてなく
かくて久しくおとゝ
ちかおとゝのとあやし

一段 春日まうて 初丁
二段 ふら野山 十丁オ七行
三段 山北いろく 十七丁オ八行

かの君こそのとゝあひ
かくて三月のついたち

一 このはな　　十五丁ウ九行　　古今和歌集のをしへかり給ひ候

此一帖古今集を此集の末に書入ことに一巻ほども

入るゝ事まてあるまし候は御抄に此帖のうちとられ

たる枕の書とて三条西殿の御伝のをとや花蔵星乃

ゆうは口伝き一巻にてありぬへきなり又一本に書

おきつる白波乃おくに山の色く の末は此くもりとと

いふなり此巻の末まてとゝなりに書入と申る事によ

る事ハ かきつけし跡の うつし此巻 このやうにあるまし枕乃巻といふ良ぞ

おしとそこそうといふとく伝道にも八ヶ書まして候へは

おほむきたまへり法華ともに此は白波乃末にかきおくて

ひとつ文ならはいふてあやまりなんへくの支佐なとは

巻よりたはまへの方の海にて枕は二巻に於なとり

にて此伝へし

枕乃巻は奥いときまりよりあとく文の後り也

よりある事にて是にて伝へし

嵯峨流　八帖　今に嵯峨家にて下す

一帖　まつ此流の

二帖　山花　　四十丁ウ八行　　かくのことくこれ九の花

二段 きんく 十ケウ十二行 かくて永文九月九日

四段 御かくら 廿五丁ウ二行 かくて十二月になりて

又段 御賀の事 廿四丁オ九行 かくて[illegible]文

六段 ことさやうし 三十七丁ウ十二行 くれぬれは月たちて

七段 なりとも 四十二丁四行 かくてたゝのおほ殿のなかより

八段 御賀 五十二丁二行 太政大臣廿七日にてまゐる

菊の使

一段 菊乃使 初丁

二段 五月五日の節 四丁ウ九行 五月五日はとく

二段 はりとの 十五丁ウ六行 かゝるほとに六月はつかひ

四段 夏はらへ 廿丁ウ二行 すゝら十七日なんまゐるへき

又段 ねの滝 廿五丁オ十二行 ちかのねとての山のとより

六段 こと宮い 三十一丁オ四行 かくて新嘗祭の日

七段 いなし 四十三丁六行 深草何事はかなく[illegible]

吹上

上十段

一段 あらし 初丁

二段 やとりも里風 四丁ウ六行 かゝるほとにきさきのみこ

三段 三日はとく 十丁ウ三行 かくてみないてしら[illegible]

四段 林はうゐん 十八丁ウ 三行 かくれなき大夜のちとせ

五段 [illegible]院 廿三丁オ 八行 かくて三月十二日に

六段 くも井乃丈 廿五丁オ 五行 三月中の十日ハかりに

七段 京[illegible] 廿八丁オウ 八行 三月晦日ハかりのゆめ

八段 [illegible] 三十四丁オ 六行 かくて姫君[illegible]八

九段 [illegible] 廿六丁オウ 初行 三月つこもり

十段 [illegible] 三十七丁ウ 二行 かくて四月一日

十一段 こ[illegible]のみ[illegible] 四十一丁オ 七行 かくて四月四日ハかり

姫き河守 下 四段

一段 [illegible] 初丁 九月一日ハいてかつしき

二段 [illegible] 二丁ウ 五行 かくてみやときのひかり

三段 [illegible] 十二丁ウオ 九行 かのおこるゆひ人を

四段 [illegible] 廿一丁オ 九行

菊[illegible] 上下九段

一段 きく乃[illegible] 初丁

二段 かくれ[illegible] 八丁オ 六行 かくしも[illegible]

三段 まひのし 十三丁ウ 五行 かくて大将殿

四段 [illegible] 十九丁オ 八行 かくてきさいの宮

五巻 祝水 三十丁ウ 初行 かくて魚へ入りゐて

六巻 そてさき 三十三丁ウ 二行 かくて源宰相

七巻 なかへ 四十一丁オ 五行 かくてやよひ

八巻 源宰相 四十七丁ウ 初行 宰相のきみは原まゐて法ゐて

九巻 志賀の山かけ 五十九丁 四行 源宰相もとよりさきさきおはしへ給ハ

あて宮 四巻

一巻 御まいり 初丁

二巻 庚申 十丁ウ 九行 かくて二月中の十日

三巻 侍従のきさき 十六丁ウ 六行 源少将ハ山ごもり

四巻 御ふみ 廿五丁オ 五行 かくてあて宮はいかにしたまひや

春日御子て極の巻は奥書丁の書いときおほえ云より巻の綴まてあて宮は書の綴所へより とあるを次丁にあへし

内侍のかみ 第七巻 今年初風

一巻 みさこ 初丁

二巻 仁寿殿 十七丁オ 九行 かくて七月はいつか

三巻 すまひの節 廿九丁オ 十一行 かくてすまひのさち

四巻 松むし 三十九丁ウ 三行 さく（本ノママ）その日いとめてたく

五巻 御息所 五十五丁オ 二行 かくれおとまうへはかはるはかて

六段 内侍のかみ 六十九丁オ 二行 さいておりまして
七段 やおくりもの 九十三丁ウ 五行 たのもしき人なり

沖津白波 二段

一段 十五夜 初丁
二段 御むこともと 十四丁ウ 四行 かくて今はゝかるまし

菊の花ひらき 上八段

一段 菊囲 初丁
二段 若菜集 八丁オ 十一行 かくて久しくなりぬ
二段 姫小川 廿二丁オ 五行 昔々ありて

四段 作りの子 四十四丁ウ 四行 かくてその日も
五段 内侍のかみ 五十六丁ウ 初行 内侍のかみは
六段 新文 十九丁オ 十行 深中納言
七段 松虫のうた 三十五丁ウ 三行 かくていぬるや
八段 なとり川 七十九丁オ 七行 かくておとと

菊の霜 中下 十五段

一段 御文 初丁
二段 なし作 廿三丁オ 八行 あはれの君なし作
三段 三番 廿四丁オ 初行 かくて大なる君

四帖 なきたの(?)

五帖 古人

六帖 あやまれ月狩

七帖 かゝら菓

八帖 次の海

九帖 いまの子や

十帖 そハえ

十一帖 きられ

十二帖 万とゐ

三十二丁オ 十行 三条殿にて遊びれえ

三十八丁ウ 初行 かくておやしのこりて

四十三丁オ 六行 かくて三条殿よりかへりて

三十一丁ウ 三行 かくて源中納言

下

十八丁ウ 初行 かくて大殿ハひのゆまゝ

十七丁オ 七行 又の日三条殿にまゐりて

十四丁オ 十一行 右のおとゝの

廿五丁ウ 四行 あくて氏このりになりぬれハ

三十六丁ウ 二行 かくてついたち比日

十三帖 子日

十四帖 なつかし

十五帖 車あらひ

四十丁オ 四行 二十日あまりいてはるゝと

四十四丁ウ 初行 かくておはしまして月ころて

四十四丁ウ 十一行 かく宮様になしつるまで

玉ゆかし 上十二帖

一帖 右大殿

初丁

二帖 おもきおもく

四丁オ 五行

三帖 若菜

十三丁ウ 三行 かくて右の大臣殿

四帖 源をめ

二十丁オ 初行 かくて三日すこして

五帖 からめり

十九丁ウ 二行 かくれ殿よ一夜より

六段 夜沢
七段 呉竹
八段 三の井
九段 玉水
十段 おとの縁
十一段 はちお花
十二段 郭中納言
一段 大会

國田津屯 中十二段

三十二丁オ 十一行 さてはかまん宰相
三十九丁ウ 七行 かくて宗佐か佐史
四十二丁ウ 五行 かくておほとのまちハ
四十五丁ウ 八行 かくて姫君かきさきの町
五十二丁オ 二行 かくて神無月二月廿日
五十五丁ウ 十行 かくてよろつの人ハ多かり
七十一丁ウ 四行 かくてあつまの此月に
初丁

二段 雲のさかり
三段 蓬莱山
四段 たちところ
五段 すまよし
六段 陀羅尼
七段 万里
八段 わし山
九段 御そし亀
十段 秋のひ

三丁ウ 十行 かくて中納言
八丁ウ 九行 かくて宗佐か
廿丁オ 三行 かくして中納言
廿六丁ウ 四行 かくて夜沢かまた
三十二丁ヲ 十行 かくて一夜五月よりいまの頃
四十二丁ヲ 初行 かくて此海のは海のこと
四十九丁ウ 六行 かくて若中納言
五十八丁ヲ 九行 かくて二夜姫君ハ
七十二丁ヲ 三行 かくて十日ハかりありて

十帖 これさき 廿八丁オ 六行 かくて 東文七

国ゆつり 下十三帖

一帖 后乃文 初丁

二帖 ふゆのはり 十二丁オ 初行 かくて 御諸出たり

三帖 すゑこ 十四丁ウ 二行 かくてきさいの宮

四帖 沙石位 廿四丁ウ 初行 かの源禰宜御門佐せうとまろも

五帖 色尾 三十丁ウ 初行 かくて宮もとは 十月になりぬれは

六帖 東文姫 四十七丁ウ 二行 かくて三條の院

七帖 姫君 五十二丁オ 初行 かくていとおかしかり

八帖 春宮まいり 廿四丁オ 十行 六 かくて春宮まいり

九帖 あらはし 七十丁ウ 七行 かくて大川のほとりを経て

十帖 ほかのあき 七十三丁ウ 十行 かくて世中さたまりぬ

十一帖 千里乃る 八十五丁ウ 十行 かくてそむはかりの中宮に

十二帖 おきつれ 八十三丁ウ 初行 かくて大将殿

十三帖 菊のはな 九十三丁ウ 四行 かくて年いとおそきとしまて

桜はらへ 十四帖

桜のうへは上下二巻にて帖なり文帖とは

隣をとらへしさきあまりは巻ととなり

一段 石作 十一條

一條 さらり川
二条 松まつ夜
三條 いしはり
四條 とこなつ川
五條 琵琶
六條 むらさき
七條 日の君
八條 こまち

初丁
十丁ウ 又行
二十丁オ 八行
四十丁オ 四行
十丁オ 八行
十三丁オ 八行
十四丁ウ 又行
十九丁オ 九行

かつ拍子東崖流
かつていしはり
大概ハ中ニて
次て…一の比
中ニ流…
又此日夜ニ…
中ニいまの宮

九條 山ぶき
十條 みはし
十一條 浅きのふし

廿丁ウ 廿行
廿三丁ウ 廿行
二十丁オ 二行

かつて浅梅花
くてうち東女
大式のかまさく

梅花うへ 上八條

一條 琴ゆふなき
二條 ふりはと
三條 たまく
四條 二院
五條 蝶

廿八丁オ 六行
三十丁オ 四行
三十六丁ウ 又行
四十丁オ 十行
四十六丁ウ

大概ハ院うち東女
かんこおもむき
大概ハ内とくも
大との院まいり
いぬや…

六条 中将師
七条 み侍
八条 みちとる
三段 桜乃之
一条 ひろな 本ノミ
二条 しほて
三条 語り竹人
四条 念
五条 春夜

廿七丁ウ 十行 大和もろこしの
六十七丁オ 六行 三日月より白河の
九十九丁ウ 初行 月にけあけ白日事く
下七条
初丁 あて文いとくしねそう
十丁ウ 四行
十丁オ 十一行 大和国よりも高く
十九丁オ 五行 大和人より
廿七丁オ 十行 流こそりうた

六条 七夕月
七条 きらん
四段 京極
一条 御室様
二条 楽
三条 笛
四条 ひとつかく
五条 旅人中納
六条 古事 本ノミ

卅丁ウ 二行 七月七日いぬるや
卅三丁ウ 初行 大和もろこし姫しのよ
十四丁オ 十一行 八月流こそり
四十八丁ウ 二行 十宮乃よそり
五十七丁ウ 初行 古比人の良しえ
五十九丁オ 十一行 かつて白ら事ろり
二十六丁オ 二行 このさんの孫
六十八丁ウ 初行 陸の里人ひ初めありて

壬辰春正月
老人筆之櫻[illegible]

35枚

七條 あらきまひ
八條 京極
九條 はくしる

二十二丁ウ 二行 いぬゐやに思ふかく
廿五丁オ 六行 朱雀院にとりて内侍のかみ
七十八丁ウ 七行 院の上 二所

西岡川口氏藏

待賈堂

タルエヤ 五〇 ×

一ノ甲ノ上